

日本語と中国語の 結果キャンセル構文について

崔 玉花

要 旨

本稿は同じ意味内容を表すと思われる日本語と中国語の動詞が結果キャンセル構文の成立において異なる文法性を示す現象を取り上げ、当該構文の容認度に影響する要因を英語との比較を通して考察する。まず、目的語の量が特定されているか否かは日英語の当該構文の容認度に影響する要因であることを示す。また、日本語では自動詞文の表す出来事の性質も当該構文の容認度に影響する要因であることを述べる。次に、中国語では日英語と異なり、目的語の定性と特定性が結果キャンセル構文の容認度に影響しないことを示し、当該構文の容認度に影響するのは動詞のアスペクト性であると論じる。

キーワード

結果キャンセル構文 達成動詞 目的語 自動詞文の表す出来事

1 はじめに

動作主が活動をし、その意図されたことが達成することを表すタイプの動詞を Vendler(1967)は達成動詞と呼んだ。ところが、日本語ではこのタイプに属する動詞は、次に示すように、前節で働きかけと結果の達成を述べながら、後節でその結果性を否定する結果キャンセル構文¹に生起できる場合と生起できない場合があることがしばしば指摘されている。

- (1) a. *太郎は次郎を殺したけど、次郎は死ななかつた。
b. *John killed Bill, but Bill didn't die.
- (2) a. { ϕ /紙を} 燃やしたけど、燃えなかつた。
b. *John burned it, but it didn't burn.

(池上 1980-1981(2): 22)

¹ 佐藤 (2005) は「結果キャンセルの他動詞文 (結果キャンセル文)」と呼んでいる。池上 (1980-1981, 1981, 1999-2000) の一連の研究では、本稿で言う「結果キャンセル構文」に対して明確な名称を与えていない。

(1)の kill と「殺す」は、共に殺すことを意図して活動をした結果、相手が死ぬという意味をその語彙意味内に含んでいる達成動詞のため、前節「太郎は次郎を殺した」と後節「次郎は死ななかった」は、意味的に矛盾を引き起こしてしまい、当該構文は容認されなくなる。一方、(2b)の英語動詞 burn は、物を燃やすという活動の結果、物が燃えてその物の状態変化が起きるという意味が含意されているため、前節 John burned it と後節 but it didn't burn は、意味的に矛盾が生じる。これに対して、(2a)の日本語動詞「燃やす」を含む結果キャンセル構文は容認される。

面白いことに、中国語では日英語の動詞「殺す/kill」に一見対応するように思われる動詞“杀”を含む結果キャンセル構文が成立する。

(3) a. 张三 杀 了 李四 两次, 李四 都 没 死.

張三 殺す Asp 李四 2-CL 李四 さえ ない 死ぬ

b. * John killed Peter twice, but Peter didn't die. (Tai 1984 : 291)

c. * 太郎が次郎を 2 回殺したけど、次郎は死ななかった。

では同じ意味内容を表すと思われる動詞が、このように言語によって結果キャンセル構文の成立において異なる文法性を示すのはなぜであろうか。この疑問を探るべく、本稿では日本語と中国語の当該構文の容認度に影響する要因を英語との比較を通して考察していくが、その前に日本語の当該構文に関する先行研究を調べ、その問題点を述べる。

2 先行研究

2.1 動詞の意味構造に基づく分析

池上(1980-1981,1981,1999-2000)は、冒頭で示したデータに基づいて、日本語と英語の動詞でどちらか一方に達成の含意があって他方ない場合は、ほぼ首尾一貫して英語に達成の含意があり、日本語にはないと指摘している。そして、英語と日本語の「達成動詞」における差を、まず、「他者に向けられた行為を表す動詞の意味が『自動詞化』する」日本語特有の傾向にあるとみる。この「自動詞化」は、日本語において目的語が統語的に義務的要素ではないので、「行為の影響を被る対象が動詞に伴わなければ、行為の他者指向性の意味合いも当然弱められる」ことに由来すると説明する。そしてこのことの一例として、(4)のような目的語があるかないか、また目的語が「湯」のように「結果の目的語」であるかどうかで、容認度が(4a)から(4c)の順で低くなっている例を挙げている。

(4) a. 沸かしたけど、沸かなかったよ。

b. ?水を沸かしたが、沸かなかった。

c. *湯を沸かしたが、沸かなかった。

より左右される事実として次のようなものが挙げられている。括弧の中のポイントはアンケートの結果の平均値を基に判断したものであるが、ポイントが高いほど容認されやすい文と判断されている。

- (6) a. レールのさびついたカーテンをあけたけれど、あかなかった。 <39.7>
b. カーテンをあけたけれど、あかなかった。 <29.2>²

同じ動詞「あける」が用いられている(6)において、例文 a が例文 b より許容度が高いのは、「カーテンをあける」よりも「レールのさびついたカーテンをあける」ほうが難しいという日常的知識に基づく推論がはたらくためであると分析している。

結果キャンセル構文の解釈が、常に日常的知識に基づく推論により左右されるという佐藤の説明では、4 節で述べるが、中国語のように、当該構文の容認度が明らかに動詞のアスペクト性により左右される事例についてはうまく説明できないのである。また、本稿では、日本語の結果キャンセル構文についても、佐藤とは一線を画し、目的語名詞句の定性あるいは特定性とそれがもたらすアスペクト限定機能という観点から分析を行う。

3 日本語の結果キャンセル構文

3.1 目的語の定性と特定性

これまで日本語と違って英語の達成動詞は結果キャンセル構文に生起不可能であることを見てきた。しかし、英語の達成動詞も次に示すように、キャンセル可能になる場合がある。

- (7) a. * John cleared the snow from the path, but there was still some left.
b. John cleared snow from the path, but there was still some left.
(Ikegami 1988: 397)

(7)は「ジョンがこの舗道から雪を取り除いたが、まだ少し残っている」の意味を表す文であり、a と b では、前節に現れる動詞と後節で表す内容が同じであるが、前節に現れる目的語が the snow のような定名詞句かあるいは snow のような物質名詞であるかによって文法性が異なっている。

これは、目的語いかにアスペクト的事態が変化する次のような事実とも一致する。

- (8) a. Chuck ate an apple {in an hour/*for an hour}
b. Chuck ate the apple {*for an hour/in an hour}
c. Chuck ate apples {*in an hour/for an hour}
d. Chuck ate ice cream {*in an hour/for an hour}

² 動詞「開ける」を含む結果キャンセル構文を非文と判断する研究者もいる。本論文における日本語の結果キャンセル構文の判断は、基本的に池上の一連の研究に従っている。

(Tenny 1994: 24)

(8a)(8b)は、目的語が量の特特定されている名詞句なので、一定量のリンゴを食べればその活動が終結することを意味し、延々と続く時間の継続を表す *for hours* という句と意味的に矛盾する。逆に(8c)(8d)は目的語が特定されていない複数形や物質名詞なので、継続する活動に焦点があり、*for hours* とは意味的に矛盾しない。Tenny(1994)は、(8ab)のような特定された量を表す目的語は動詞句に限界性をもたらし、完了的事態を表すので、この場合の目的語はアスペクト限定の機能をもつという³。

このように、英語では目的語いかに動詞句が完了的事態を表したり、非完了的事態を表したりする。これはまさに(7)における a と b の文法性の対立とも一致している。つまり、目的語の量が特定されている(7a)は、完了的事態を表すため、「まだすこし残っている」の意味を表す後節と矛盾する。これに対して、目的語の量が特定されていない(7b)は、明確な終了点をもたない非完了的事態を表すので、前節と後節は意味的に矛盾が起らず、適格文となる。

ここで日本語の場合を見てみると、日本語では次に示すように、目的語が裸の名詞である(9a)-(11a)は容認されやすいのに対して、目的語が指示詞や特定の数量詞を伴い、定名詞句や特定名詞句と解釈される(9b)-(11b)は容認されにくい⁴。

- (9) a. 皿を乾かしたけど、乾かなかった。 (池上 1980-1981 (2): 23)
- b. {??その皿/*すべての皿} を乾かしたけど、乾かなかった。
- (10) a. ? 水を沸かしたけど、沸かなかった。 (池上 1980-1981 (3): 25)
- b. * 100cc の水を沸かしたけど、沸かなかった。
- (11) a. 紙を燃やしたけど、燃えなかった。
- b. ??* 紙 2 枚を燃やしたけど、燃えなかった。

ではなぜ、目的語が裸の形式の場合、日本語では結果キャンセル構文が容認されやすいのか。本稿は、日本語において目的語が裸の形式であれば、不特定多数としての解釈が可能で、結果としてそれを含む動詞句が非完了的事態を表せることに起因すると考える。池上(1980-1981)で指摘されているように、日本語では名詞に「単数」と「複数」の対立が存在せず、数や定性の表示は義務的ではないので、多くの場合、裸の名詞の数的解釈および

³ Tenny (1994) は、状態変化動詞や *eat* のような漸次主題動詞 (*incremental them verb*) と共起する目的語が特定された量を表す場合は、アスペクト限定の機能をもつと言う。一方、活動動詞の場合は、次に示すように、目的語が特定された量を表す名詞句であるか否かにかかわらず、アスペクト限定の機能を持たず、動詞句は非限界的事態を表すと言う。

(i) Susan shook {the tree/trees} {*in an hour/ for an hour} . (Tenny 1994: 13)

北原(1999)三原(2002)は、日本語においても目的語の定性や付加詞の存在などが動詞句の限界性に決定に関与していることを指摘している。詳細は北原(1999)三原(2002)を参照のこと。

⁴ 先行研究で指摘されているデータ以外で本稿に挙げている日本語の結果キャンセル構文のデータは、母語話者 5 人を対象に行ったインフォーマント調査の結果に基づいている。

特定性は曖昧である。しかし、結果キャンセル構文のように完了的事態とそぐわないような環境においては、それと整合可能な非完了的事態を引き出すために、裸の名詞は不特定多数として解釈される必要があると言える。本稿は、目的語を含む動詞句が非完了的事態を表すと、達成動詞は結果よりも活動に焦点が置かれて解釈されやすいため、当該構文が容認されやすいと考える。逆に、目的語を含む動詞句が完了的事態を表すと、動詞は結果に焦点が置かれて解釈されやすいため、当該構文が容認されにくいと考える。つまり、(11)ではどちらの文にも達成動詞の「燃やす」が用いられているが、(11a)が容認されやすいのは、裸の目的語を含む動詞句が非完了的事態を表すため、結果として動詞が「紙が燃えた状態」の意ではなく、「紙を燃やす活動」をしていることに焦点が置かれて解釈されるためであると考えられる。一方、(11b)が容認されにくいのは、動詞句が完了的事態を表すため、結果として動詞が「紙が燃えた状態」の意に焦点が置かれて解釈されるためであると考えられる。

このように、目的語が特定された量を示す名詞句であるか否かは日本語と英語の結果キャンセル構文の容認度に影響する要因であると考えられる。

3.2 自動詞文の表す出来事

前節の議論からすると、日本語では目的語が特定された量を表す場合、達成動詞を含む結果キャンセル構文が容認されにくいという予測が成り立つ。しかし、この予測に反し、(12b)は容認される。

(12) a. *太郎は次郎を殺したけど、次郎は死ななかった。(=(1a))

b. 花子を起こしたけど、起きなかった。(池上 1999-2000 (13): 52)

(13) * I woke the child, but he/she didn't wake. (池上 1999-2000 (13) : 52)

(12)では、目的語がともに、単数の固有名詞からなる定（であり特定のである）名詞句であるにもかかわらず、動詞「殺す」を含む結果キャンセル構文は容認されないのに対して、動詞「起こす」を含む結果キャンセル構文は容認される。(13)は、動詞「起こす」に対応する英語動詞 *wake* を含む結果キャンセル構文が容認されないことを示している。

本稿では、(12a)と(12b)の対立は前節の他動詞に対応する自動詞文の表す出来事の性質と関係していると考ええる。自動詞の表す出来事が「内的原因による(internally caused)」ものと「外的原因による(externally caused)」ものに分類されるという提案は、Levin & Rappaport Hovav (1995) をはじめとする多くの研究者によってなされているものである。このうち、内的な原因をもつ自動詞には、*tremble* のような感情動詞 (verbs of emotion) や *glitter* のような放出動詞 (verbs of emission) が含まれる。これらの動詞の表す出来事は、主題の自発的な感情的反応や放出体の内的物理的特性といった内在的原因により起るもののため、外部からの作因を受け付けることができない。これは外的な原因をもつ *open* のような動詞と違って、それに対応する他動詞用法をもたない事実からも説明できる。

- (14) a. The jewels glittered. → *The queen glittered the jewel. (L&RH 1995:92)
b. The door opened. → Antonia/the wind opened the door. (L&RH 1995:85)

(14a)に示すように、「宝石が輝く」という出来事は、宝石本来の力によって引き起こされるものであり、外からの作因により実現する出来事ではない。これに対して、(14b)では、ドア自体が開閉する能力をもっているが、「ドアが開く」という出来事が実現するためには、自然力を含めた外部からの働きかけが必要である。この点において、動詞 *open* は、放出動詞 *glitter* と異なり、それに対応する他動詞用法をもつと考えられる。

以下では、上に示した概念が日本語の結果キャンセル構文の容認度とどう関わっているのかについて見ていく。一般的に、達成動詞は、単純過去形で使われる場合、次に示すように、括弧に示す自動詞の表す出来事の成立を含意すると考えられる。

- (15) a. 花子を起こした。 (「花子が起きている」ことを含意する)
b. 次郎を殺した。 (「次郎が死んでいる」ことを含意する)

本稿では、このような含意される自動詞文の表す出来事は、それ自身の内在的原因により起こるものと、外的原因により起こるものに区別されると考え、この違いにより、(12a)と(12b)のような対立が生じると主張する⁵。例えば、(12a)における「次郎が死ぬ」という出来事は、外からの何らかの働きかけによって起こるものである。もちろん、「死ぬ」という出来事は、年を取ることに伴い、自然に死ぬ場合と、他の誰から命を奪われて死ぬ場合があるが、ここで問題にしているのは外的な原因により起こる後者の場合であるだろう。一方、(12b)における「花子が起きる」という出来事は、「目を覚ます」ことを意味し、このような出来事は変化体の内的原因により起るもので、外からの働きかけがあつたとしても「目を覚ます」といった出来事の成立を司るのは「起きる」の主題である「花子」自身であると考えられる。これは次の(16)との比較からも明らかである。

- (16) ??* 転んだ息子を起こしたけど、起きなかった。

「転んだ息子が起きる」ということは「起き上がる」ことを意味し、この場合、自動詞文の表す出来事は、外部からの助けによって実現される。

また、次に挙げる(17)(18)が容認されやすいのも、自動詞文の表す出来事が内在的原因により起るもののためであると考えられる。

⁵ 英語と違って自他転換の接辞をもつ日本語では英語より自他交替が自由に行われる。したがって、日本語では英語のように他動詞用法をもつか否かを基準として、自動詞の表す出来事を区別することが難しい。

(17) a. 油と水を混ぜたけど、混じらなかった。(Ikegami 1988: 392)

b. 一リットルの油と水を混ぜたけど、混じらなかった。

(18) a. 電気をつけたけど、つかなかった。(影山 1996: 85)

b. ?そこの部屋の電気をつけたけど、つかなかった。

「液体が混じる」という出来事は、変化体内に原因がある自発的過程で起るもので、その成立を司るのは液体自体である。また、「電気がつく」という出来事は、スイッチを操作しても、電球が切れていたり、ブレーカーが落ちていたりして、つかないこともあり得る。つまり、「電気がつく」という出来事の実現には、電気系統のような媒介の存在が前提となるため、それに対する外部からの働きかけがいくらあっても、かならずしもその出来事が実現するとは限らないのである。

ここから本稿は、(12a)(16)と(12b)(17)(18)の対立を次のように捉える。まず、(12b)(17)(18)では、外部から「体を揺さぶる」「液体を同じ容器に入れる」「スイッチに手を触れる」といった働きかけがあったとしても、それは単なるきっかけに過ぎず、「目を覚ます」「液体が混じる」「電気がつく」といった出来事の成立を司るのは変化体自身である。このような状況では、動詞「起こす」「混ぜる」「つける」は、目標の達成を意図して活動が行われているものの、その目標は実現しなかったという読みが可能である。つまり、この場合、これらの動詞は結果よりも活動に焦点が置かれて解釈されるため、前節と後節の表すイベントの間に矛盾が生じないと考えられる。これに対して、外部(動作主)からの働きかけが出来事の成立を司っている(12a)(16)では、目標達成に焦点が置かれて解釈されやすいため、後節の状態変化(次郎が死んだ状態)「息子が起きた状態」)が起こらなかった、という読みと矛盾すると考えられる。

4 中国語の結果キャンセル構文

日本語では 3.1 節で示したように、目的語の定性および特定性によって結果キャンセル構文の容認度が変わるわけであるが、中国語では次に示すように、このような影響は見られず、いずれも適格文となる。

(19) a. 我 烧 了 {水/100 毫升 的 水 /一壶 水} , 可是 还 没 {开 / 烧开} 。

私 沸かす Asp {水/100-CL GEN 水 /1-CL 水} けど まだ ない {沸く/沸かす-沸く}

b. {?水/*100cc/* 1 壶} の水を沸かしたけど、沸かなかった。

(20) a. 我 切 了 那 块 铁板, 可是 没 切 断。

私 切る Asp あの CL 鉄板 けど ない 切る-切れる

b. * あの鉄板を切ったけど、切れなかった。

(21) a. 我 折 了 那 根 树枝, 可是 没 折 断。

私 折る Asp あの CL 木 枝 けど ない 折る-折れる

- b. * あの枝を折ったけど、折れなかった。
- (22) a. 我 昨天 写 了 一 封 信, 可是 没 写 完。 (Tai 1984: 292)
私 昨日 書く Asp 1-CL 手紙 けど ない 書く・終わる
- b. * 昨日一通の手紙を書いたけど、書き終わらなかった。
- (23) a. 他 去年 盖 了 一 栋 房子, 但 到 现在 还 没 盖 完。
彼 去年 建てる Asp 1-CL 家 けど まで 現在 まだ ない 建てる・終わる
- b. * 去年家一軒を建てたけど、まだ {建たなかった/建て終わらなかった}。
- (24) a. 我 昨天 在 隔壁 修理店 修 了 那 块 手表, 可是 没 修 好。
私 昨日 で 隣 修理屋 修理する Asp あの CL 腕時計 けど ない 修理する・直る
- b. 昨日隣の店であの腕時計を {*直した/修理した} けど、直らなかった。

以上の事実は、目的語が特定された量を表す名詞句であるか否かは中国語の当該構文の容認度に影響しないことを示している。ここで特に(24)に注目されたい。中国語の動詞“修”を含む結果キャンセル構文は日本語の活動動詞「修理する」を含む文と同様の文法性を示している。これは、中国語動詞“修”が日本語の達成動詞「直す」に対応するのではなく、活動動詞「修理する」に対応することを示していると言える。

他言語において結果まで含意する動詞が中国語では行為のみに重点を置く傾向が強いことがしばしば指摘されており、Tai(1984)は、英語の達成動詞と同じ意味内容を表すためには、複合動詞の形式を用いる必要があると言う。これは単音節他動詞の後に結果の達成を表す要素をつけると、結果キャンセル構文が成立しない次のような事実から裏付けられる。

- (25) a. * 张三 杀 死 了 李四 两次, 李四 都 没 死。
張三 殺す・死ぬ Asp 李四 2-CL 李四 さえ ない 死ぬ
- b. * John killed Peter twice, but Peter didn't die. (Tai 1984: 291)
- (26) a. * 我 切 断 了 那 块 铁板, 可是 没有 断。
私 切る・切れる Asp あの CL 鉄板 けど ない 切れる
- b. * あの鉄板を切ったけど、切れなかった。
- (27) a. * 我 烧 开 了 {100 毫升 的 /一壶} 水, 可是 没有 开。
私 沸かす・沸く Asp {100-CL GEN /1-CL } 水 けど ない 沸く
- b. * {100cc/ 1 壺} の水を沸かしたけど、沸かなかった。
- (28) a. * 我 昨天 修 好 了 那 块 手表, 可是 没 好。
私 昨日 修理する・直る Asp あの CL 腕時計 けど ない 直る
- b. * 昨日あの腕時計を直したけど、直らなかった。

(25)-(28)は、単音節他動詞の後に結果の達成を表す要素をつけると、日本語と同様、当該構文が容認されないことを示している。これは、中国語の単音節他動詞は活動動詞であるが、結果複合動詞になると、他言語の達成動詞と同様の意味内容を表すためであると考えられる。

また、中国語の単音節他動詞が結果を含意しない活動動詞であることは、時間表現との共起において、結果複合動詞と異なる文法性を示すことから裏付けられる。

(29) a. John built that house in a month. (Doewty 1979: 62)

b. 彼は一ヶ月であの家を建てた。

c. ?? 他 在 一个 月 内 盖 了 那 栋 房子。

彼 at 一ヶ月 in 建てる Asp あの CL 家

c'. 他 在 一个 月 内 盖 好 了 那 栋 房子。

彼 at 一ヶ月 in 建てる・終わる Asp あの CL 家

(30) a. ?? 我 在 一个 钟头 内 写 了 那 封 信。

私 at 1-CL 時間 in 書く Asp あの CL 手紙

‘私は一時間であの手紙を書いた。’

b. 我 在 一个 钟头 内 写 完 了 那 封 信。

私 at 1-CL 時間 in 書く・終わる Asp あの CL 手紙

‘私は一時間であの手紙を書き終わった。’

(29)と(30)に示したように、単音節他動詞は期限を表す時間表現と共起しないのに対して、結果を表す要素が付加された複合動詞では共起できる。これは、(29)における中国語の動詞“盖”は活動動詞であり、複合動詞“盖好”が日英語の達成動詞「建てる/build」に対応するためであると考えられる。

このように、中国語の結果キャンセル構文の容認度に影響するのは動詞のアスペクト性であり、単音節他動詞を含む当該構文が成立するのは、中国語の単音節他動詞が結果状態を含意しない活動動詞のためであると考えられる。

5 まとめ

本稿では、日本語と中国語の結果キャンセル構文の容認度に影響する要因を英語との比較を通して考察した。まず、目的語が特定された量を表す名詞句であるか否かは日英語の当該構文の容認度に影響する要因であり、日本語では目的語が裸名詞の場合、不特定多数として解釈されうるため、当該構文が容認されやすいと主張した。また、自動詞文の表す出来事の性質も日本語の結果キャンセル構文の容認度に影響する要因であることを明らかにした。本稿は、同じく達成動詞を含む結果キャンセル構文でも、目的語の量が特定されていない場合やまた他動詞に対応する自動詞文の表す出来事が内在的原因による起こる場

合は、動詞が結果よりも活動に焦点が置かれて解釈されやすいため、当該構文が容認されやすいと論じた。次に、中国語では日英語と異なり、目的語の定性と特定性が結果キャンセル構文の容認度に影響しないが、これは中国語の単音節他動詞が結果を含意しない活動動詞であることに起因し、当該構文の容認度に影響するのは動詞のアスペクト性であると主張した。

参考文献

- アラム佐々木幸子 (2001) 「燃やしたけど、燃えなかった」のはなぜ? 「弱い達成動詞」と「強い達成動詞」 南雅彦・アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育Ⅱ』 57-74, くろしお出版.
- 池上嘉彦 (1980-1981) 「‘Activity’ — ‘Accomplishment’ — ‘Achievement’ — 動詞意味構造の類型」 『英語青年』 1980.12~1981.3, 研究社出版.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- 池上嘉彦 (1999-2000) 「‘Bounded’ vs. ‘Unbounded’ と ‘Cross-category Harmony’」 『英語青年』 1999.4~2000.11, 研究社出版.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版.
- 北原博雄 (1999) 「日本語における動詞句の限界性の決定要因 — 対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論 —」 『ことばの核と周縁—日本語と英語の間』 黒田成幸・中村捷 (編), 163-200, くろしお出版.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院.
- 三原健一 (2002) 「動詞類型とアスペクト限定」 『日本語文法』 2-1: 132-152, 日本語文法学会, くろしお出版.
- 宮島達夫 (1985) 「「ドアをあけたが、あかなかった」 — 動詞の意味における<結果性> —」 『計量国語学』 14-8: 335-353.
- 宮島達夫 (1989) 「動詞の意味範囲の日中比較」 『ことばの科学 2』 179-198.
- Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague’s PTQ*. Dordrecht: Reidel.
- Ikegami, Yoshihiko (1988) “Transitivity: Intransitivisation vs Causativization: Some Typological Considerations Concerning Verbs of Action,” in C. Duncan-Rose and T. Vennemann (ed.), *On Language: Rhetorica, phonologica, Syntactica*, 389-401.
- Levin Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Tai, James (1984) “Verbs and Times in Chinese: Vendler’s Four Categories,” *CLS Parasession on Lexical Semantics*, 289-296.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in philosophy*, Cornell University Press, N.Y.

On the Resultative Cancellation Construction in Japanese and Chinese

Yuhua CUI

This paper takes up the phenomenon which the verbs of Japanese and Chinese considered express the same semantic content shows different grammaticality in the formation of the result cancellation construction, and discusses the factors which influence the grammaticality of the resultative cancellation construction in Japanese and Chinese through comparison with English. First, it is shown that the specificity and definite of the object is a factor which influences the grammaticality of the resultative cancellation construction in Japanese and English. It is also shown that the property of the event which the intransitive verbs expressed influences the grammaticality of the resultative cancellation construction in Japanese. Next, it is shown that unlike Japanese and English, the specificity and definite of the object does not influence the grammaticality of the resultative cancellation construction in Chinese. This paper argues that the factor which influences the grammaticality of the resultative cancellation construction in Chinese is a verbal aspect.